

今週の為替相場見通し(2021年7月26日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		109.07 ~ 110.59	110.54	109.00 ~ 112.00
ユーロ	(ドル)		1.1752 ~ 1.1831	1.1769	1.1650 ~ 1.1800
(1ユーロ=)	(円)		128.61 ~ 130.29	130.13	129.00 ~ 131.00
英ポンド	(ドル)		1.3573 ~ 1.3787	1.3749	1.3700 ~ 1.3800
(1英ポンド=)	(円)	*	148.47 ~ 152.17	151.96	150.70 ~ 152.20
豪ドル	(ドル)		0.7290 ~ 0.7402	0.7364	0.7250 ~ 0.7450
(1豪ドル=)	(円)	*	79.85 ~ 81.77	81.44	80.10 ~ 82.60

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 小林 元子

(1)今週の予想レンジ: 109.00 ~ 112.00 円

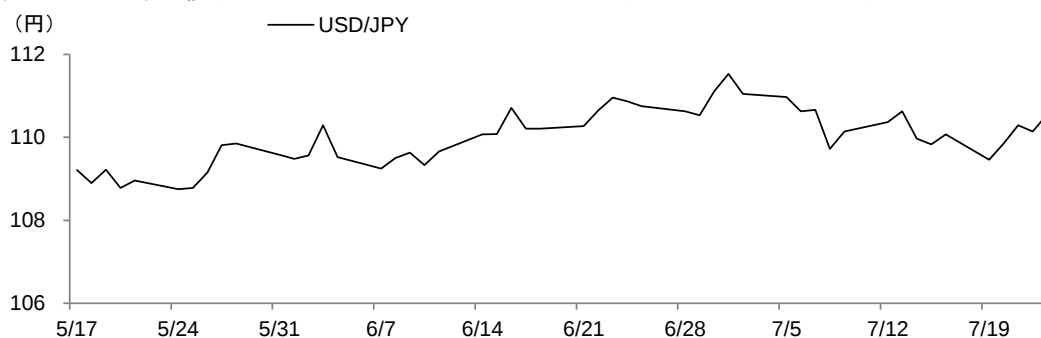
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は、週後半に上昇する展開となった。週初19日、109.90円付近でオープンしたドル/円は、110円手前での小動きとなったが、海外時間に入ると新型コロナウイルスの感染再拡大を懸念した世界経済の先行き不透明感からリスク回避の円買いが進んだほか、米長期金利の急低下に伴うドル売りの勢いも強まって、一時週安値の109.07円まで急落。その後も軟調地合いとなった。20日、ドル/円は新たな材料がない中で狭いレンジでの推移となったが、海外時間に入ると米株式市場が前日の下落から反発し、米長期金利が上昇に転じて、小動きながらもじり高となり、110円台近辺まで値を戻した。21日、本邦4連休を前に次第に膠着感が強まり東京時間は小幅レンジにて推移。海外時間において欧州株やダウ先物が上昇する動きに円売りが優勢となり、米金利上昇を受けたドル売りも加わり、ドル/円は上昇基調となり、110.30円付近でクローズ。22日、本邦4連休となる中、前日NY時間の上昇を意識した利益確定の動きからか、アジア時間午前中のドル/円は小幅に下落。海外時間においてECB政策理事会結果を受けたユーロ売りにドル/円は堅調な値動きとなり、ドル/円は110.16円でクローズした。週末23日、リスク回避の動きが後退し米金利が上昇する中、ドル/円はじり高で推移し、海外時間において米7月製造業PMIが予想を上回る一方、サービス業PMIが予想を大きく下回ったこともあり、110.39円まで下押しするが金利が再び上昇したことから110.59円まで値を戻し、110.54円で越週した。

今週のドル/円相場はサプライズがなければ高値圏でもみ合いの展開を予想する。27日(火)~28日(水)の日程で米国においてFOMCが開催予定となっている。現行の金融緩和策を維持する見通しとなっているが、今回の会合においてテーパリングを巡る議論が注目されている。今までのハト派スタンスを変えなければ特段ドル売りとなる材料もない中、ドル/円相場は110円台後半でのみ合い推移となるか。一方で、再び早期利上げ観測や緩和縮小に関連した発表があれば、ドル買い相場となろう。また、29日(木)に米4~6月期GDP(速報)の発表も予定されており、こちらも強い数値となればドル買い材料の一因となろう。ドルの下落要因として、米国内で新型コロナウイルスの新規感染者数は拡大傾向あり、再び前週初に見られたような市場心理の悪化により米国株式市場が下落する局面があればドル売りを誘う要因となることに留意したい。

(3)先週末までの相場の推移

先週(7/19~7/23)の値動き: 安値 109.07 円 高値 110.59 円 終値 110.54 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

市場営業部 為替営業第二チーム 小野崎 順基

(1) 今週の予想レンジ: 1.1650 ~ 1.1800 129.00 ~ 131.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は、軟調地合いとなった。週初19日、1.1810付近でオープンしたユーロ/ドルは、世界各地での新型コロナウイルスの感染再拡大懸念や原油価格の下落によるリスク回避の動きから、ドル買い圧力に下押しされて1.17台半ばまで値を下げた。その後、米長期金利の低下を受けたドル売りが強まったことで上昇に転じ1.1824まで値を上げた。20日、ユーロ/円が下落する動きに連れ安となり1.1755まで下落。その後も米金利が徐々に上昇する動きにドル買いが進んで、上値の重い推移となった。21日は一時週安値の1.1752をつけたのちやや反発。対円を除くとドル売りが優勢の流れの中でドル売りユーロ買いも見られ1.1805ドルまで上昇。しかし、その後は翌日にECB政策理事会を控える中で上値を伸ばすことはなし。ECB政策理事会に対しては「ハト派姿勢の継続」といった見方も強く上値の限られた動きとなった。22日はECBを控えて様子見ムードであったものの、海外時間に開催されたECB政策理事会において、フォワードガイダンスを変更。「持続的な金融緩和を維持する」と確認した上で、「インフレ率が一時的に目標を緩やかに上回る期間も含まれる」と明記。また、インフレ率の目標を「2%弱」から「2%」と改めた。この結果、ECBがこれまでの見通し以上に長い期間、政策金利を最低水準に維持すると捉えられユーロは大きく売られることとなった。その後は、ラガルドECB総裁の記者会見を受け一旦ユーロが買い戻され一時週高値の1.1831まで戻した。23日のユーロドルはほぼ横ばい。前日に重要イベントとされていたECB理事会を終えたことで方向感に乏しい展開となった。

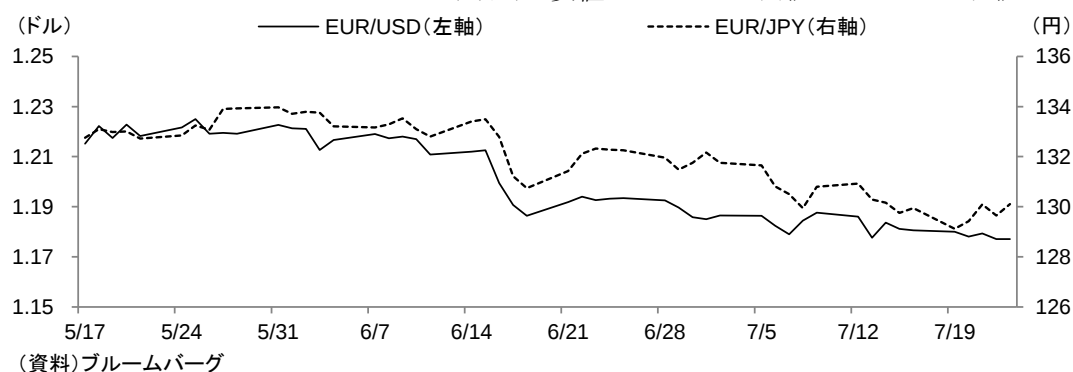
今週のユーロは上値の限定的な動きを想定。ワクチン接種の進捗で少しずつ景況感は改善しておりその点は好材料。今週は30日(金)にユーロ圏4-6月GDP速報値や7月消費者物価指数速報値が公表されるが良好な結果であればユーロの下支えとなろう。ただし、先週のECB理事会において「インフレ率が一時的に目標を緩やかに上回る期間も含まれる」と明記するなど、インフレ率が一時的に2%から上振れても容認する姿勢を示し、大規模緩和の継続姿勢が強調された格好。そうした中で上値についても限定的となりそう。

(3) 先週までの相場の推移

先週(7/19~7/23)の値動き:

(対ドル) 安値 1.1752 高値 1.1831 終値 1.1769

(対円) 安値 128.61 高値 130.29 終値 130.13



3. 英ポンド

欧州資金部 本多 秀俊

(1) 今週の予想レンジ: 1.3700 ~ 1.3800 150.70 ~ 152.20 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、値幅はそこそこ出たものの、英側の要因に乏しく、振り返ってみれば概ね横ばい。下押し先行後、週央以降反発に転じ、対円、対ユーロでは僅かながら(前週末比で)水準を切り上げて週の取引を終えた。週明け19日の主要通貨市場は、リスク回避の円高で始まった。リスク回避を促した要因としては、前週に引き続き世界各国におけるコロナ禍の再拡大が挙げられ、市場における反応は、円高の他、米長期金利低下、原油価格急落などといった形でも表れた。もっとも、原油急落には、18日のOPEC+による協調減産緩和(=増産)合意などの固有の要因もあったし、米長期金利低下にもかかわらず(対円を除き)対ユーロ、対ポンドなどではドル高が進行するなど、コロナ禍拡大とリスク回避だけでは説明し切れない反応もいくつか観察された。週初観察された円高を除けば、その後のポンドの値動きは、大枠でドル指数の上下動に一致し、ドル主導の値動きであった可能性を示唆した。他には、22日の理事会で欧州中銀が「物価誘導目標を+2%を中心とする(+2%の上振れも許容する)」「(3年後の)経済予測よりも足元データに基づく判断をする」など、今後の利上げに関しより消極的な方向に変更したことが、週引けにかけてのユーロ軟調を誘ったことが金融通貨市場の目を引いた。

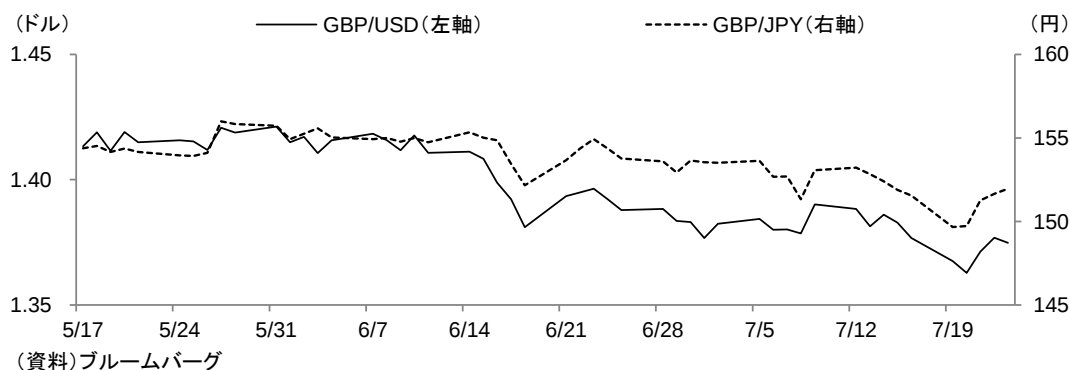
今週の英ポンド相場は、方向感を欠いた横ばいを予想。先週のポンドの値動きは、ドルの値動きを色濃く反映していたが、上述の通り、ドル指数は米長期金利急落と並行して上昇し、同金利反発を受けて水準を切り下げている。こうした反応は、6月央以降特に顕著になった組み合わせと言えるが、長期金利と通貨の連動という分かり易い材料の不在を意味している。また、欧州中銀による22日の決定は、ユーロの重石になったものと受け止められたものの、対ユーロでのポンド反発は同決定発表に明確に先行しており、実のところ、対ポンドのユーロの値動きにはほとんど影響しなかったように見えた。目先のポンド相場の膠着を見込むのは、要因と値動きとがあまり合わないこうした状況から、先行きの見通しを立てるのが困難だからだ。英中銀の金融政策に関しては、先週、金融政策委員会のハスケル委員(19日)やブロードベント副総裁(22日)らが、目先の金融緩和撤回(=金融引き締め)に消極的な姿勢を相次いで示したものの、ポンドの反応は交錯しており、通貨市場が同銀の金融政策動向に注目しているとは考え難かった。英経済指標も、今週は、28日(水)にネーションワイドの7月住宅価格、29日(木)に英中銀の6月住宅ローン承認件数といった住宅関連指標の発表が目につく程度で、ポンドが材料視する可能性は低い。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(7/19~7/23)の値動き:

(対ドル) 安値 1.3573 高値 1.3787 終値 1.3749

(対円) 安値 148.47 高値 152.17 終値 151.96



4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 安藤愛

(1) 今週の予想レンジ: 0.7250 ~ 0.7450 80.10 ~ 82.60 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は0.73割れまで下落後、0.73台半ばまで上昇。19日、前週からのリスクオフの流れを引き継ぎ株価が続落する中、シドニーでコロナ規制が一段と強化されたことや、VIC州のロックダウン延長にかかる決定が重しとなり豪ドルは終日軟調。7月中に意識されていたサポートライン0.74をブレイク後一時は昨年11月以来の安値0.7323まで下落。20日、リスク回避の流れを背景に豪国債利回りが大きく低下すると豪ドルにも下値圧力がかかり、0.73ちょうどまで下落する局面があった。その後、低下が継続していた米10年国債利回りが上昇に転じると、株価が大きく上昇。豪ドルも0.7330近辺まで戻して引けた。21日、豪6月小売上高が予想比下振れたことをきっかけに下落し、一時0.7290を付けた。その後、ロンドンオープン後から押し目買いが入り、上昇に反転。NY市場時間に入り、堅調な企業決算を好感して株価が一段と上昇すると、豪ドルも買い進まれ0.7360近辺まで上昇。22日、NSW州におけるコロナ新規感染者数が今年に入り最多を記録したとの報道を受けて売りが先行し0.7340近辺まで下落したが、豪金利上昇などに支えられその後上昇に反転。世界的なリスクセンチメントが徐々に改善する中、欧米時間にかけて堅調な推移となり、0.7380近辺まで上昇。23日、東京休場で特段材料が無い中、薄商いが継続。0.7370を挟む小動きに終始し、方向感の無い展開となった。尚、良好な企業決算を背景に、米主要株価はNY市場時間にかけて最高値更新したが、豪ドルの押し上げ材料とはならなかった。

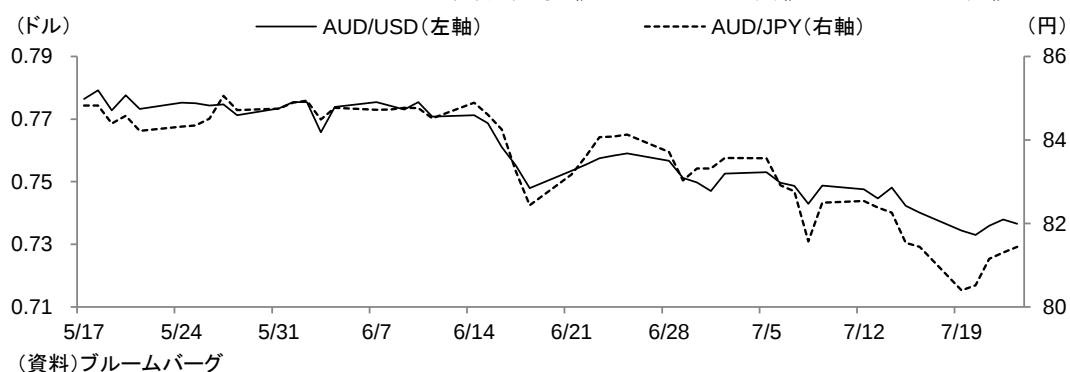
今週の豪ドルは下値堅めの展開を予想する。今週の豪州注目イベントは27日のデベルRBA副総裁講演、28日豪4〜6月期CPIとなる。豪州各地でのコロナロックダウンが長期化する中、経済への影響が意識され始めている。来週のデベルRBA副総裁の講演では、9月から開始予定のテーパリング(7月RBAで発表)の先延ばし、ないしは購入額拡大の可能性について言及があるかどうか注目される。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(7/19〜7/23)の値動き:

(対ドル) 安値 0.7290 高値 0.7402 終値 0.7364

(対円) 安値 79.85 高値 81.77 終値 81.44



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。